

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

岡崎市方言敬語伝統形式および新形式ミエルの消長：  
継続サンプルの分析より

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): traditional dialectal honorifics, new dialectal honorifics, intermediate forms, mieru, standardization of polite forms 作成者: 辻, 加代子, TSUJI, Kayoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000535">https://doi.org/10.15084/00000535</a>

## 岡崎市方言敬語伝統形式および新形式ミエルの消長

——継続サンプルの分析より——

辻 加代子

神戸学院大学／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

本稿では、愛知県岡崎市で3次にわたって行われた大規模言語調査の中心部分、敬語行動に関する面接調査の回答を対象として分析し、この地の方言敬語に起こった変化について報告する。分析するにあたって、(1) まず、回答に出現した形式を標準語形・方言伝統形・方言新形・中間形に分類し、その全体的使用状況、(2) 場面ごとの使用状況、(3) 場面ごとの方言敬語形の使用状況を調査した。方言新形には、ミエル・チョーダイなどを含めた。中間形には、方言形と標準語が連続した表現や、要素の形態は標準語と同一で組み合わせや承接の仕方が異なる表現を含めた。中間形は標準語を指向しつつも方言の干渉により産出したと考えられる表現であり、丁寧語と関わる表現に多く見られた。分析の結果次のことが明らかになった。

1. 全場面標準語形だけを使用する話者は大幅に増大し、逆に方言伝統形使用者は激減、中間形は第2次調査で微増、第3次調査で激減している。場面別分析により、標準語形ないし方言形は場面にあわせて選ばれていることが確認された。例えば、電報局のような公共機関や東京での道聞きといった非方言場面では方言使用が避けられる傾向にある。中間形は非方言場面でも多く出現する傾向にあったが、第3次調査では方言自体の使用が激減し、それに伴いほとんど使用されなくなった。

2. 方言敬語形は、第1次調査時は多様な形式を残しつつも出現数は少なく、第3次調査時には伝統形(ラ)レル、新形ミエル以外ほぼ壊滅状態であった。伝統形が使われる場合内輪の方言場面で多く使われる傾向にあった。敬意の低い形式であった(ラ)レルは上位場面に使用場面を広げ、ミエルともども他の尊敬語と重ねて盛んに使われるようになり、標準語的な用法への変化をうかがわせる。

3. 中間形の存在は、一部の方言話者にとって丁寧語の習熟が意外に難しいこと、標準語の敬語運用能力は均質なものではないことをうかがわせる\*。

**キーワード：**方言敬語伝統形、方言敬語新形、中間形、ミエル、丁寧語の共通語化

### 1. はじめに

本稿では、国立国語研究所により愛知県岡崎市において1953年、1972年、2008年の約半世紀にわたって行われた敬語と敬語意識に関する3次の大規模言語調査(以下、岡崎敬語調査と呼ぶ)により得られた回答のデータを、主に形態的な側面から検討する。

\* 本稿は、平成19(2007)年度～平成21(2009)年度 文部科学省科学研究費補助金[基盤研究(A) 課題番号: 19202014, 研究代表者: 杉戸清樹]の成果の一部であり、科研費報告書および関係者に配布されたCDを資料とした。また、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」(プロジェクトリーダー: 井上史雄, 平成24年度～)の研究成果でもある。また、2012年5月19日に千葉大学で行われた「日本語学会2012年度春季大会」でのワークショップ、および2012年6月2日と2013年3月19日に国立国語研究所で行われた「国立国語研究所 共同研究プロジェクト研究発表会」における発表内容に大幅な加筆・修正をしたものである。その際の指定討論者の先生方、席上貴重なご指摘・ご教示をお寄せ下さった方々、査読の先生に心よりお礼を申し上げます。

岡崎敬語調査が行われた岡崎市が位置する西三河の方言敬語は、尾張と三河との敬語諸事象の複合体系が形成され、愛知県でももっとも複雑な体系だとされる（江端 1981）。岡崎市の東には、方言敬語の少ない東三河の地が、その先には無敬語的地域の遠州や下伊那郡が広がる（彦坂 1991）。岡崎市方言の敬語表現には、敬度の高いオイキル形（オ+動詞連用形+ル）、（サ）ッセル、敬意の低い（ラ）レル、尾張から入ってきたとされるミエルのような尊敬語（助）動詞類、尊敬と丁寧の機能を併せ持つオ～ヤス、親愛を表す終助詞ンなどがあるとされる（愛知県教育委員会 1993）。このンは語調を和らげ親愛の念を込める表現で、少し目上の人や同等の相手に使用されるとされ、標準語で言えば丁寧語の機能の一部を担っていると考えられる。これらの報告から、岡崎市の方言敬語には、現代標準語の敬語とは形態面だけでなく体系面、運用面からも異なる面もあったことが予想される。

当地は東西方言の境界地帯に位置し、西部方言的特色と東部方言的特色とが入り混じり、敬語以外にも、現代標準語とは異なると思われる言語項目も少なくない。岡崎敬語調査は敬語行動・敬語意識が場面によってどのように違うか、ということ課題とし、敬語行動に見られる敬語形式の全体を問題としてきた（国立国語研究所 1957: 3）。個別の言語形式や敬語表現は場所により時代により変化するものであり、その敬語行動・敬語意識の土台となるものである。岡崎市の方言敬語に標準語のそれとは異なるものがある以上、それをきちんと把握しておく必要があるし、そのためにはまず形態的な検討が必要だと考えた。

以上をふまえ、岡崎市において第1次から第3次調査までの約半世紀の間に方言敬語に関してどのような変化が起こっていたかを概観することが本稿の目的である。

## 2. 分析対象について

本稿で扱うのは、3次にわたって行われた岡崎敬語調査の根幹部分をなす敬語行動に関する面接調査の言語項目（100番台の質問項目）のデータ（エクセルに入力された反応文）である。分析対象場面と分析したデータの詳細については以下で説明する。

### 2.1 分析対象としたデータ

第1次調査のサンプルはプロパーグループ（Proper Group; 研究者が調査した被調査者）とコントロールグループ（Control Group; 学生が調査した被調査者）の両方のサンプルを対象とする。

第2次調査以降はランダムサンプリングによる継続調査サンプル（トレンドサンプル）のみを対象とした。この継続調査のサンプルを後続調査で追跡したパネルサンプルは対象としない。

本稿で経年変化という場合、1953年、1972年、2008年の調査時ごとの実時間的な変化を指すことになる。

### 2.2 分析対象場面

分析対象とする場面は、100番台の回答のうち、第2次調査114「公害問題」場面を除いたものとする。114番は大勢の前で意見を述べるという場面であるため、他の場面とはスタイルが大きく変わるであろうと考えたからである。

なお、経年的変化を見る場合は、3回の調査とも質問内容がほぼ同じとなっている101～111番、および113番の場面のデータを用いた。

112番は、第1次調査で「物売り」、第2次調査以降「魚釣り」となった。また、第2次調査から「先生の絵」が加わり、第3次調査では第三者敬語表現の設問が4問加わっている。これらの場面については必要に応じて分析を行った。

### 2.3 分析の方針

これまでの報告では、方言に関しては第1次調査で、方言形をまじえているか否かと丁寧さとの相関を分析した報告があるくらいで、直接方言敬語を取り上げたものはない。回答には、伝統的な方言敬語形が少数ながら出現しているほか、方言形と標準語形とが融合ないし連続しているものや、要素の形態は標準語と同一だが、組み合わせや承接の仕方が標準語とは異なる表現が少なからず出現していることがわかった。これらは、話者が標準語を使おうとする際、方言が無自覚的に混ざったり、形式は同じだが機能の異なる方言形式を機械的に標準語に変換しようとして産出した中間言語的表現だと考えられる。方言の「行くだ」を「行くです」とするような表現であり、丁寧語と関わる表現に多く見られた。以下ではこれらの表現を中間形と呼ぶことにする。本稿では、岡崎市の方言敬語に加えて、この中間形や方言も視野に入れて経年変化の状況を見ていくことにした。中間形を検討することにより当地における標準語の丁寧語受容の実情を探ることができると考えたからである。

## 3. 方言形使用の経年変化

岡崎市方言は、1節で触れたようにちょうど東西方言の境界に位置しているため、西部方言的要素と、東部方言的要素とが入り混じった状況にある。そうした状況は、敬語表現、例えば丁寧表現や、命令依頼表現などに反映することが予想される。そこで、まず大きく状況をつかむために、話者ごとの、標準語形、方言形、中間形の使用状況について調べた。さらに方言形の中には、伝統的な在来形式（以下方言伝統形と呼ぶ）の他に、新来ないし新興のミエル、チョーダイのような形式も報告されている（愛知県教育委員会1993、江端1981）ので、それらを方言新形として両者を分けて分類した。方言伝統形、方言新形、中間形それぞれに分類した際の具体例を下に示し、愛知県教育委員会（1993）などを参考に適宜説明を加える。

### 3.1 形式分類の内訳

回答に出現した形式のうち標準語形以外のものを、分類類型として立てた方言伝統形、方言新形、中間形の順に以下に示す。

#### I. 方言伝統形

##### i. 敬語項目

- ・ 尊敬語（補助）動詞類：オイキル形（オ+動詞連用形+ル）・（ラ）レル・（サ）ッセル

オイキル形は五段動詞や変格動詞の場合、「おかきる（書く）」「おせりる（する）」のような形になり、一段動詞と同じ活用をする。また、2拍の一段動詞は語幹の後に「り」が挿入され、「おみりる（見る）」「おきりる（着る）」となる。この形は、次に述べるラッセルなどと同じく、この地の一段動詞の五段化の一環であることが指摘されている（愛知県教育委員会 1993 他）。

国立国語研究所（1957: 22）では、岡崎市方言にある「高い敬語形式」として紹介し、活用を示している。「かく（書く）」を例に取り上げてその活用を示すと下のようになる。

かく（書く）

おかきん（お書きにならない）

おかきた（お書きになった）

おかきたら（お書きになったら）

おかきます（お書きになります）

おかきましょお（お書きになってください）

おかきて（お書きになって）

おかきやあ（お書きになれば）

おかきに＜なった＞（お書きに＜なった＞）

ただし、本稿では標準語の敬語である「お書きになる」「お書きになった」のようなナル敬語（菊地 1994: 117）は別のものと考え、オイキル形としてはカウントしていない。

（サ）ッセルは、（サ）セラルルから方言化したものと考えられるとされる（彦坂 1991）。五段動詞に続くトッセル、一段動詞に続くトサッセル、ラッセルとなる。

（例）いかつせる（行く）、きさつせる・きらつせる（着る）

この（サ）ッセルは、尾張では第三者にしか使用できないが、西三河では話し相手にも使用できるということである（江端 1981, 愛知県教育委員会 1993）。

（ラ）レルは、愛知県教育委員会（1993）では敬意は低いとされ、この三種の尊敬語に関しては、敬度の高い順に示すとオイキル形≡（サ）ッセル＞（ラ）レルのようになる<sup>1</sup>。

他に、（オ）～ナサルも集計に加えた。この形は標準語と同じ形ではあるが、「困っていなさるで」「忘れなさったで」のような言い方は方言的だと判断した。なお、国語調査委員会編（1906a）「第二十條」、「岡崎地方」の項ではナサルは全活用形が備わっていること、連用形は旧藩で「なさい・なさツ（て）（た）・なすツ（て）（た）・なすツ（て）（た）」、町部で「なされ・なさツ（て）（た）」となり、命令形は旧藩、町部とも「なさい」だといふことが報告されている。

- ・尊敬と丁寧の機能を併せ持つもの：オ～ヤス
- ・丁寧の機能を持つもの：

マスル「下車いたします」「ありがとうございます」のように使う。

<sup>1</sup> 愛知県三河地方における「お行きる」式語法の実態を報告した古瀬（1971）では、「行かれる」・「お行きる」・「お行きる」・「行かさせる」の順に敬度が高い、としている。また初対面の人とか、あらたまった場とかの使用には、共通語同様「行かれる」である、としている。

(デ) オマス・(デ) ゴザンス・(デ) ガンス

- ・終助詞：ネ・ン・ノなど

終助詞は語調を和らげ親愛の念を込める表現で、少し目上の人や同等の相手に使用される（愛知県教育委員会 1993）。助詞ナ・カ（疑問）に付いてナン・カンのように使われる。ナンは間投助詞用法もある。

ネは標準語と区別しにくいだが、明らかに標準語と異なるゾネ、ガネ、動詞終止形+ダネのような連続の見られた場合はカウントした。

- ・依頼、勧告表現：～リン・～トクンナ・～テクンナ・～テオクレン（サイ）など

岡崎市民は自分達の言葉の特徴を「ジャン、ダラ、リン」と言う言葉で表し、それが三河一帯の表現の特徴でもある。～リンはその一角をなす言い方で、愛知県教育委員会(1993)では、ミリン、オミリン、ネリン、オネリンというように、相手に「～しなさい」と勧告を示す場合に使用される、としている。五段動詞の場合は「おかきん（書く）」「おいきん（行く）」となる。

～テクンナは相手に物事を頼むときに、親しい男性の間で用いる言い方だとされる。

## ii. 敬語以外の語法項目

- ・ン（否定）、オル（居る）、トル（ている）、ダ（ノダ相当）、デ（原因理由）、ケンド（逆接）、形容詞ウ音便、サ行イ音便（「傘さいた（傘さした）」の「さいた」のようなもの）など
- ・準体助詞ノや格助詞ノの省略：「（議事堂へ）行くのに」と言う所で「（議事堂へ）行くに」と言う。例文（1）参照。

※以下では、例文（＝発話例）を示す際、末尾の【 】内に調査時、場面の順に示す。例文（1）の【1次：議事堂】は第1次調査、「議事堂」場面だということを示す。

- (1) マコトニ ブッシツケデ シツレーデ ゴザイマスガ ギジドーエ イクニ ドンナ  
フーニ イッターラ ヨロシユー ゴザイマスカ 【1次：議事堂】

## iii. 語彙項目

- ・ポッコガサ（ぼろがさ）のポッコ、マー イッペン（もういっぺん）のマーなど
- なお、ライシンシ（電報頼信紙）は方言形とは言い切れないので、分類から外した。

## iv. 音韻音声項目

- ・[s] 音の弱化によるハ行音：ホイデ・ホーダ…

なお、話者などに言及するオリマスは方言形と同じ語形を含むが、現代標準語の規範に合っているため方言形には分類しなかった。

## II. 方言新形

- ・（～テ）ミエル・チョーダイ・チョ・ス

ミエルは尾張から入ってきたとも。ミエルとオイデルが使用された場合、敬意はオイデルの方が上だとされる。

チョーダイも尾張から勢力を広げつつある（1960年代後半の調査時）新しい形式だとされる（江端 1981）。大石（1976）では、親愛表現に働く語としての親愛語を敬語の外延にあると位置づけ、このチョーダイや上記ナサイをその所属語としている。しかし、当該方言では、これらの語は親愛語ではなく敬語として機能していると考えられる。

チョはチョーダイの前半だけを残した形である。（例）「一枚ちょ」「置いといてちょ」

### III. 中間形

中間形に分類したものは単位の上で大小さまざまなレベルに及んでいる。また、関与する方言形は伝統形であることもあれば、新形であることもある。主なものを列挙すれば以下のとおりである。

◇「違うですけど」「出したいですが」「寝てみえるですか」「悪いですけど」

←用言終止形に続き、ノダの機能を持つ方言形ダをそのままデスに変換したために、デスの前のンが欠落していると思われる。

◇「行くです」「あるですかね」「おりるですから」

←丁寧形に変換する際、「行きます」のように標準語の「連用形+マス」という形にせず、終止形にデスをそのまま続けたと考えられるもの。あるいは終止形に続く方言形ダをデスに変換したか、判断しがたい場合もある。

◇「打つだから」

←「打つだデ（=から）」のような言い方の動詞に続く接続助詞部分だけ方言形を標準語形に変換した。

◇「お出りになった」

←「出る」に「お～になる」を重ね、「になる」の前に「り」が挿入された形になったもの。

(2) ココ マスグ オイキニナッテ オデリニナッタ ヒロイ ドオロガ コクドーデス

【1次：道教え】

◇「足りない」

←五段動詞「足る」の未然形に否定のンがついて「足らん」となるところに、標準語形ナイを続けた。これを丁寧にしようとする時、「足りないです」としかならず、標準語の規範的な形「足りません」にはならない。

◇「あなたの傘でないですか」←「傘では」の「は」が抜けている。

◇「おられます」

←当該方言の存在動詞はオルであり、オルは待遇的にニュートラルなので尊敬語（ラ）レルが続いた。「～ていられます」の形もある。

◇「どこでしょうかしら」←「かしら」を疑問助詞「か」と同じように幅広く使っている。

次に、言い方としてはおかしかったり、語法としては間違っているが、方言からの干渉であることがはっきりしないので、中間形の分類から外したものを挙げる。

◇二重敬語・三重敬語の類

◇イタダクの前部要素は尊敬語かニュートラルな形かにすべきなのに謙讓語となっているもの。

(例)「お預かりしていただけますか」

### 3.2 使用形式の経年変化

以上の分類をふまえて、過去半世紀でどのような種類の形式が使われてきたか、その変遷を概観したのが表1、図1である。101～111 & 113の場面を通して一人の話者がどんな形を使用したかを集計した。なお、以降の図表において、第1次調査のサンプル数N=429は、101～111 & 113の全場面で回答が得られなかった1名を含む。

表1 場面を通した使用形式の経年変化 (101～111 & 113 場面)

第1次調査 (N=429)	標準語のみ	65	15.2%
	方言伝統形も使用：内訳 (伝 155 / 伝 & 新 18 / 伝 & 新 & 中 18 / 伝 & 中 129)	320	74.6%
	方言新形も使用：内訳 (新 5 / 伝 & 新 18 / 伝 & 新 & 中 18 / 新 & 中 5)	46	10.7%
	中間形も使用：内訳 (中 33 / 伝 & 新 & 中 18 / 伝 & 中 129 / 新 & 中 5)	185	43.1%
第2次調査 (N=400)	標準語のみ	89	22.3%
	方言伝統形も使用：内訳 (伝 122 / 伝 & 新 12 / 伝 & 新 & 中 12 / 伝 & 中 106)	252	63.0%
	方言新形も使用：内訳 (新 3 / 伝 & 新 12 / 伝 & 新 & 中 12 / 新 & 中 4)	31	7.8%
	中間形も使用：内訳 (中 52 / 伝 & 新 & 中 12 / 伝 & 中 106 / 新 & 中 4)	174	43.5%
第3次調査 (N=306)	標準語のみ	162	52.9%
	方言伝統形も使用：内訳 (伝 55 / 伝 & 新 10 / 伝 & 新 & 中 1 / 伝 & 中 28)	94	30.7%
	方言新形も使用：内訳 (新 10 / 伝 & 新 10 / 伝 & 新 & 中 1 / 新 & 中 2)	23	7.5%
	中間形も使用：内訳 (中 38 / 伝 & 新 & 中 1 / 伝 & 中 28 / 新 & 中 2)	69	22.5%

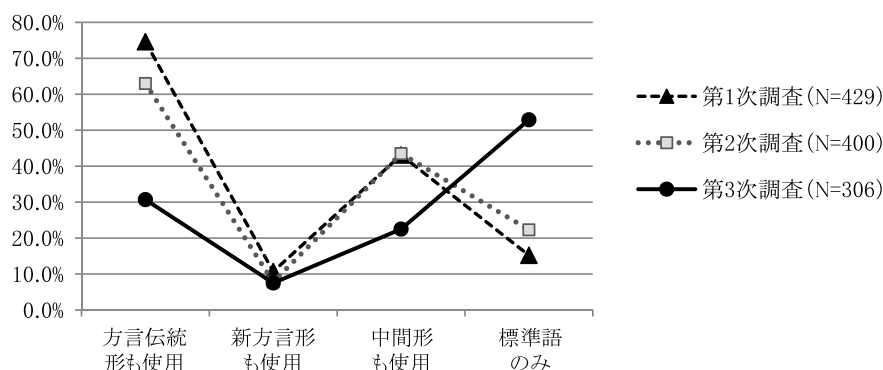


図1 場面を通した使用形式の経年変化 (101～111 & 113 場面)

すべての場面を通して標準語のみで (標準語形のみを使って) 回答した話者は、第1次調査では約15%にすぎなかったのが、第3次調査では52.9%と大幅に増大している。方言伝統形は逆に大幅に減少し、それにとまって中間形も減少している。方言新形はこの101～111 & 113場

面では第3次調査でわずかに減少しているが、この点については後で改めて述べる。中間形は第1次調査より第2次調査でごくわずかながら使用者を増やしていることも注目される。

語法、語彙、音韻項目とも第3次調査でもある程度残った方言形は原因理由を表す接続助詞デ(20名使用)くらいで、存在トル(16名使用)、否定ン(13名使用)、存在オル(テオル・デオル含む、8名使用)、動詞終止形に直接続くダ(4名使用)が続く。なお、中間形は、第1次、第2次調査とも40%以上でかなりの高率であったのが、第3次調査では半減している。

### 3.3 場面ごとの使用形式の経年変化

次に場面ごとに集計した結果を表2に示す。

各場面の設問の概略を国立国語研究所(1957, 1983)により示すと次のとおりである。

- 「道教え」 知らない旅行者から道を聞かれたとき教える  
「電報用紙」 電報局で電報用紙をもらう(第3次「振込用紙」郵便局で振込用紙をもらう)  
「荷物預け」 買いつけの店で荷物を預ける  
「傘忘れ」 乗物で傘を忘れていきかけた人に注意してやる  
「先生」 昔の先生に子供のことについて答える  
「集金人」 間違って2度電灯料を取りに来た集金人に言う = 「電灯料」  
(第3次「新聞代」間違って2度新聞代を取りに来た集金人に言う)  
「議事堂」 東京で議事堂に行く道をたずねる  
「医者」 医者に往診を頼む  
「席譲られ」 乗物で席を譲られて断わる  
「おつり」 買いつけの店でもらったおつりが間違っていることを言う  
「傘貸し」 少し知っている人々にわか雨のとき傘を貸す  
「市役所」 父に頼まれて市役所に行くところだということを目上の人に言う

表2 場面ごとの使用形式の経年変化(101～111&113場面)

調査	形式分類	道教え	電報(振込)用紙	荷物預け	傘忘れ	先生	集金人	議事堂	医者	席譲られ	おつり	傘貸し	市役所
第1次 N=429	標準語	324	378	291	348	414	295	363	298	318	245	277	294
	伝統形	93	25	110	37	9	112	34	117	103	123	139	123
	新形	2	13	5	1	0	9	2	8	2	4	12	1
	中間形	8	10	30	48	3	14	34	25	8	73	6	3
	NR	6	5	1	1	3	4	1	1	1	2	1	10
第2次 N=400	標準語	305	347	307	341	398	315	349	302	328	234	326	346
	伝統形	80	22	71	40	1	74	30	84	65	77	66	50
	新形	2	5	3	1	1	3	1	14	0	0	4	0
	中間形	8	28	24	17	0	8	22	14	7	92	2	4
	NR	8	3	1	2	0	4	2	0	2	3	3	2
第3次 N=306	標準語	235	299	278	282	303	284	294	262	287	242	282	289
	伝統形	27	2	18	10	0	14	3	32	15	13	20	11
	新形	2	1	1	5	0	2	1	5	1	5	4	1
	中間形	0	1	7	7	0	5	3	8	3	48	1	0
	NR	42	3	2	3	3	3	5*	4	1	3	1	5

\* 回答なし1を含む

場面ごとに、有効回答（サンプル総数 N から回答が得られなかった件数 NR を引いたもの）のうちの標準語のみを使用する話者の率、および伝統形も使用する話者の率をそれぞれ図 2 と図 3 に示した。図 2 では、第 1 次調査で方言形使用率の高かった場面順に配列した（第 1 次ソート）。図 3 では、第 1 次調査で標準語のみ使用者の率の高かった場面順に配列した。

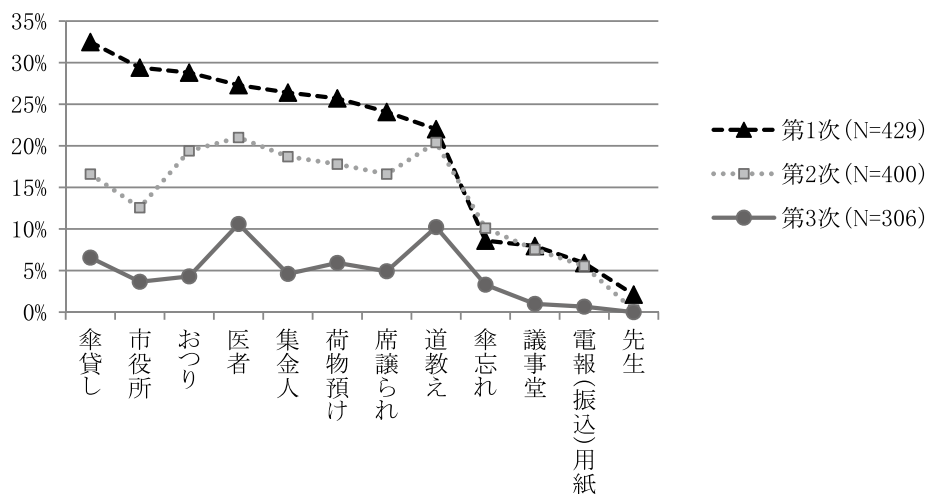


図 2 場面ごとの方言伝統形使用率の経年変化（第 1 次ソート）

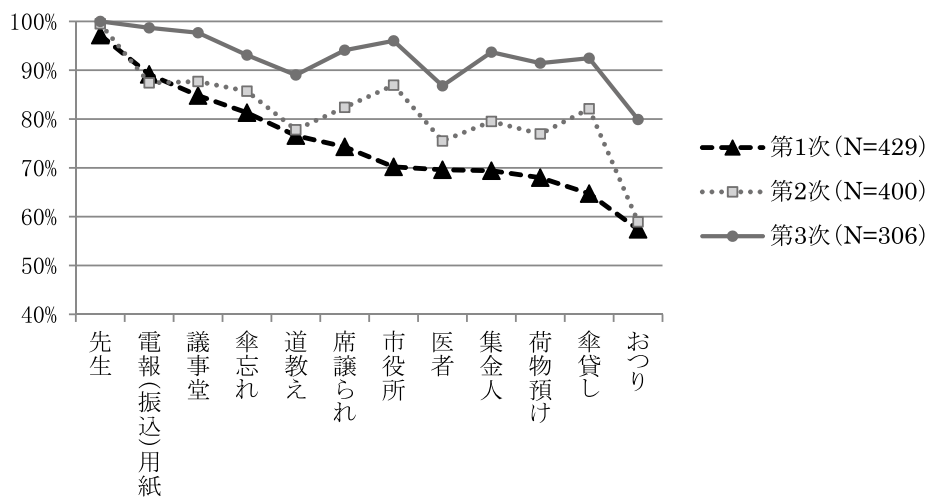


図 3 場面ごとの標準語のみ使用率の経年変化（第 1 次ソート）

(1) 図 3 で標準語のみを使用する話者について見ると、第 1 次調査では多い方から「先生」「電報用紙」「議事堂」「傘忘れ」「道教え」「席譲られ」「市役所」「医者」「集金人」「荷物預け」「傘貸し」「おつり」場面の順になっている（表 2 も参照）。

(2) 図 2 で方言伝統形が多かった場面は、第 1 次で「傘貸し」「市役所」「おつり」の順、第 2

次と第3次で「医者」「道教え」であった。第3次調査で全体的に激減しているのがわかる。また、場面間の高低を見ると、第1次調査では「道教え」と「傘忘れ」の間で大きく減少しているのに対し、第3次調査では「傘忘れ」と「議事堂」との間にも落差があり、「議事堂」「振込用紙」「先生」は0%に近い使用率となっている。

標準語使用が多く伝統形使用が少ない場面は、場所の設定が東京であったり、郵便（電報）局であったり、見ず知らずの人が相手であったりする場面である。

(3) 中間形は第1次「おつり」17.1%、「傘忘れ」11.2%、「議事堂」7.9%、「荷物預け」7.0%の順、第2次で「おつり」23.2%、「電報用紙」7.1%、「荷物預け」6.0%、「議事堂」5.5%の順であった。そのうち「おつり」と「荷物預け」は買いつけの店という設定であるが、他は標準語のみの使用率の高い場面となっている。第3次では、「おつり」15.8%の他は3%以下、「議事堂」「振込用紙」は1%以下となっている。「議事堂」「振込用紙」（「傘忘れ」も）の結果に関しては標準語指向の高い場面で中間形も出やすいということが言えそうである。逆に地元の人が相手の「市役所」「傘貸し」のような場面では、終始出現率が低い。また、第2次調査で第1次調査より使用率が増えているのは「おつり」と「電報用紙」の2場面である。

丁寧さとの関係を見よう。国立国語研究所(1957: 247)では、第1次調査時の丁寧さの順位(カッコ内に第2次調査時の順位を記す)を「医者(1)」「傘忘れ(4)」「荷物預け(2)」「電報用紙(3)」「席譲られ(6)」「議事堂(5)」「先生(8)」「傘貸し(9)」「電灯料(=集金人)(7)」「おつり(11)」「道教え(10)」「市役所」「物売り(魚釣り)(12)」としている(なお、第2次調査では「市役所」を順位づけから外している)。これを図2、図3に示した今回の結果と比べると、明らかに異なっている。以上より、標準語形ないし方言伝統形は丁寧さとは独立した基準で選ばれていることが認められよう。

#### 4. 方言敬語使用の経年変化

本節では方言敬語形式についてその経年的変化の実態を見ていく。

##### 4.1 出現した方言敬語形式

表3に第1次～第3次の3回の調査で出現した場面ごとの方言敬語形式の集計結果を示す。

表では、形態的に命令や依頼の機能を持つ形式と、それ以外の形式とに分けて記した。また、場面の順番は第1次調査で方言形使用率の高い順に配列した図2と同じに並べた。

全体的に第1次調査の時点ですでに方言敬語を使用する話者の数はきわめて低かった。そして第3次調査まで残ったのは(ラ)レル(表3ではr)、ミエル(表3ではm)、チョーダイくらいで、それ以外はほぼ壊滅状態である。場面別に見ると、表3で網掛けとした「議事堂」と「電報(振込)用紙」「先生」の場面で方言敬語はほとんど使用されておらず、表2に示した方言形の結果とよく似た傾向を示している。

以下では個別の方言敬語形について伝統形と新形に分けて説明する。

表3 場面ごとの使用方言敬語形式の経年変化 (101 ~ 111 & 113 場面)

セル内の数字は使用者数

調査	形式分類	傘貸し	市役所	おつり	医者	集金人	
第1次 N=429	伝統形	命令依頼 以外	o1/オn3/n1/r10/ワシ1	o3/r85/終3/ワシ1 /オトツツアン類5	終4/ワシ3	o2/n2/r16/ワシ4 /ワタイ1	r3/ワシ3/終1/丁ヤ s1
		命令依頼 表現	オ～ニナランカ1/テオクレヤス2/テオ ～マショー類5/オ～ヤス16/テオクレ ジャナイカ1/テオクンナ2/テオイキン カ1/オ～ナサイ16/ナサイ12/テイカ ンカ2/テイキナ類9/テカッセ1/テキ ンヤレ1/テ～ヤス1	0	トクレヤス1/テオク レマセンカ1/テオク レマスカ1/テオク ンナ2/テモラエンカ類 5/テクレンカ1	テオクレマショー1/ テモラエンカ4/テク レンカ1	テモラエンカ4/テクレ ンサイ1/テクレンカ4 /テモラエン1/テンカ 1
	新形	命・依以外	m3	m1	0	尊+m1/m6/ス1	尊+m2/m6
		命令依頼	テチョーダイ9	0	テチョーダイ4	0	テチョーダイ1
第2次 N=400	伝統形	命令依頼 以外	r9/ワシ1	r14/終4/ヤス(丁 寧)1/オトツツアン3	r1/終1	r11/g1/終1/mr1	n1/r1/終1
		命令依頼 表現	オ～ヤス6/(テ)オ～ナサイ2/～レマセ ンカ1/テイカンカ1/テクレンカ1/テ カンセ1/テイキナ2/テイキン1/テキ ンサイ1/テカッセ1	テオクレマセンカ1	テモラエンカ2/テク レンカ1	テモラエンカ7/テク レンカ1	テオイデン1/テモラエ ンカ3/テクレンカ5/ テクンナ1/テモラエン 1
	新形	命・依以外	0	0	0	m11/ス2/mr1	m3
		命令依頼	テチョーダイ4	0	0	0	0
第3次 N=306	伝統形	命・依以外	r7/終1	r4	0	r16	0
		命令依頼 表現	ツカイナ2/テイキン2	0	0	0	テクレン1/テクレナ サイ1
	新形	命・依以外	ス1	ス1	ス5	m5	ス2
		命令依頼	テチョーダイ3	0	0	0	0

調査	形式分類	荷物預け	席譲られ	道教え	傘忘れ	議事堂	電報(振込) 用紙	先生	
第1次 N=429	伝統形	命令依頼 以外	ワシ1/終2	o2/丁gp5/ 終1/ワシ3	o18/オn1/ n3/r36/終6	ワシ1/o4/ n2/r16/h1 /終2	o1/丁gp4/終1	終1	ワシ1/ ボ-2/丁 gp2/終2
		命令依頼 表現	トクレヤス1/テオクンナ1/テオ クレ1/トイテクレンキヤ1/テク レンカ8/テモラエンカ3	テオイデナサ イ1/テオク ンナ1/テク ンナ1	ナサイ1	0	テモラエンカ1	オクレヤス1/オ クレンサイ1/オ クンナ1/モラエ ンカ2	0
	新形	命・依以外	0	ス1	尊+m1/m1	ス1	m1	ス2	0
		命令依頼	テチョーダイ4/テチョ1	テチョーダイ 1	0	0	テチョーダイ1	チョーダイ11/ テチョ1	0
第2次 N=400	伝統形	命令依頼 以外	デオマス1/終1	o1	o4/n1/尊+ r2/r44/終3	尊+n1/n1/ 尊+r1/r25	丁gp1/終2	終1	デオマス1
		命令依頼 表現	トクレマセンカ1/テイタダケンカ1 /テオクレヤス1/テモラエンカ4/ テクレンカ5/テクレン1/テンカ1	オ～ヤス1/ テクレヤス1	イッテコー1	0	テオクレマセンカ1 /オオシエネガエン カ1/テクレンカ1	オクレヤス1	0
	新形	命・依以外	0	0	m3	m1	m1	0	尊+m1
		命令依頼	テチョーダイ3	0	0	0	0	テチョーダイ5	0
第3次 N=306	伝統形	命・依以外	0	0	r23/テ指定1	r9	0	0	0
		命令依頼	テモラエンカ1/テクレンカ1/テ クレン2/トクレ1	0	0	0	0	0	0
	新形	命・依以外	ス1	ス1	m2	m5	0	0	0
		命令依頼	0	0	0	0	テチョーダイ1	テチョーダイ1	0

(凡例) o:オイキル形 n:ナサル r:(ラ)レル g:ゴザル(「居る」の尊敬)  
 尊+n:オ～ニナリナサル 尊+r:オ～ニナラレル m:ミエル 尊+m:オミエニナル  
 丁gp:ゴザンス(例「ヨ-ゴザンス」)・ガンス 終:終助詞類(シ・ゾネ・ガネなど)

## 4.2 方言敬語伝統形

### 〔尊敬語動詞・助動詞類〕

◇オイキル形：出現数は少ないものの第1次，第2次調査で若干数現れ，「道教え」場面で多い。オイキマス・オイキルデスと丁寧語を承接することもある。オイデルは「ている」の意味で補助動詞用法もある。

◇(サ) ッセル：「傘貸し」場面で「持ってかっせ」のような表現に1例現れたのみであり，衰退がうかがえる。

◇(ラ) レル：第1次，第2次調査とも，「市役所」で顕著に多く，「傘忘れ」でも一定数使用されている。「市役所」では父親に言及して使われた敬語のほとんどがこの形式であった。この場面での(ラ)レルの使用は，身内尊敬用法である。身内敬語の使用に関しては「岡崎市では身内の者の動作に敬語を使用することがある。…このような身内敬語は，関西的な表現であり，愛知県では西三河までのようである」（愛知県教育委員会 1993: 5）という先行研究の指摘<sup>2</sup>が裏付けられたと言える。なお，加藤（1973）では，愛知県以东では身内尊敬用法の報告が得られていないことが記されている。また，井上（2011: 302）に，「身内敬語」を使う（控えない）地域を示した地図があり，中部地方を見るとほぼ岐阜県までで，愛知県はその地域に入っていない。本調査の結果からは西三河の岡崎市あたりまでその分布地域を広げる必要があろう。

また，第3次調査「118 謙譲表現」（土地の目上の人に非常に丁寧に「私の父はすぐ来ますから」と言うときの言い方を問う設問）でも，(ラ)レル5例，ミエル3例，イラッシャル1例が現れている。ここでの尊敬語使用も身内尊敬用法が行われていることの証左となろう。

「市役所」場面<sup>3</sup>で使われるようなラレルの敬意度は低く，伝統形の性格を保持していると思われる。第3次調査では，ラレルは使用場面を広げ，使用数を増やしている場面も認められるので，性質が変化しつつある可能性がある。

◇他に，ゴザルなどが現れた。

### 〔丁寧助動詞〕

◇(デ) ゴザンス，(デ) ガンス，(デ) オマス，ヤスが第1次調査でごくわずかに現れた。第2次調査ではゴザンスとヤス各1例だけが現れた。

ヤスは「(オヤジの命令でちょっと市役所まで) 行ってきヤス」のように使われている。

### 〔命令・依頼表現〕

◇オ～ヤス形（「オ + V 〈連用形〉 + ヤス」）が第1次，第2次調査とも「傘貸し」場面で，若干数現れた他は，場面を通じてテクレンカがわずかに使用されている程度である。

<sup>2</sup> 飯豊（1987）では，本稿で言う「身内尊敬用法」を「対外身内待遇表現法」と名づけ，調査結果に基づき「愛知県は，ほぼ尾張と三河とで境界を作っている。ただし，岡崎市までは，名古屋市の影響下に入っているものと見做される」と述べている。

<sup>3</sup> 「市役所」場面の回答を見ると，「父（お父さん）が」のようにガ格をとる回答の数に大きな異なりがあり，第3次調査では著しく少なくなっている。したがって，この場面に限っては3次にわたる調査を同列で比較できないと言わねばならない。

- ◇「傘貸し」場面では様々のヴァリエーションが現れており、ジャン・ダラ・リンのリンに通じる(テ)イキン「(テ形+) V〈連用形〉+ン」のような形も現れた。
- ◇(テ)オクレンサイ・(テ)クレンサイ・(テ)オクンナ・(テ)クンナ, さらには(テ)イキンの「ンサイ」「ナ」「ン」はナサイに由来するとされる。そこから考えるとナサイは改まり度の高い形式だと考えられる。

## 〔終助詞類〕

ナン・カ (=疑問) ン・ダン・ゾン・ダイネなど

他に、一人称代名詞ワシ(方言では丁寧な表現である)がわずかに現れた。

出現した尊敬語形の待遇価値を結果から推測するために、方言敬語形(助動詞)を複数回使用した回答者をピックアップしてどの場面で誰を主語として使用しているかを調べてみた。その結果について、場面を国立国語研究所(1957: 247)の丁寧さの順(すなわち「医者」「傘忘れ」「傘貸し」「電灯料(=集金人)」「道教え」「市役所」「物売り」)に並べて示すと表4のとおりであった。

「物売り」の場面は、物売りの少年にその父親のことを尋ねる、という設定である。

なお、方言新形のミエルも参考のため表に加えた。また、[ ]内に該当する動詞述語の主語を記した。[対者]とあるのは発話の話し相手が主語の例であり、それ以外は話題の人物を[ ]内に示してある。

表4 話者による方言敬語形の使い分け

話者属性	医者	傘忘れ	傘貸し	電灯料	道教え	市役所	物売り
67歳女性	.....	.....	オn[対者]	.....	.....	r[父親]	o[子の父母]
66歳女性	.....	.....	o[対者]	.....	.....	r[父親]	o[子の父母]
64歳女性	.....	o[対者]	.....	.....	.....	r[父親]	.....
63歳女性	.....	.....	.....	.....	o[対者]	r[父親]	.....
62歳女性	.....	.....	.....	.....	.....	o/r[父親]	o[子の父母]
57歳男性	.....	.....	.....	.....	o[対者]	r[父親]	.....
55歳男性	.....	r[対者]	.....	.....	o[対者]	.....	.....
52歳女性	.....	.....	o[対者]	m[別の集金人]	.....	.....	o[子の父]
51歳男性	r[隣人]	.....	.....	.....	.....	r[父親]	o[子の父母]
48歳男性	.....	.....	.....	.....	.....	r[父親]	o[子の父]
47歳女性	m[隣人]	n/o[対者]	.....	.....	o[対者]	r[父親]	.....
46歳男性	.....	.....	.....	.....	o[対者]	r[父親]	.....
46歳女性	n[隣人]	.....	.....	.....	.....	r[父親]	.....
43歳女性	.....	.....	.....	.....	r[対者]	r[父親]	o[子の父]
36歳女性	.....	o[対者]	.....	.....	o[対者]	r[父親]	.....
31歳女性	.....	.....	.....	.....	o[対者]	r[父親]	.....
31歳女性	m[隣人]	.....	.....	.....	o[対者]	.....	.....
21歳女性	.....	.....	.....	.....	n[対者]	r[父親]	.....
20歳女性	.....	.....	.....	m[別の集金人]	.....	r[父親]	.....
18歳男性	m[隣人]	r[対者]	r[対者]	r[対者]	.....	.....	.....
17歳女性	.....	.....	.....	m[別の集金人]	r[対者]	.....	.....
15歳女性	.....	.....	.....	.....	.....	r[父親]	m[子の父]

〈凡例〉o: オイキル形 r: (ラ)レル オn: オ～ナサル n: ナサル m: ミエル

「医者」場面は、場面としては丁寧さが高いとされているが、表4に示した例では、医者を待遇しているのではなく、急病の隣人を待遇していることを勘案する必要がある。

「傘忘れ」で回答が分かれているのは相手が「あなたの知らない中年の人」という点にあると考えられる。調査時55歳の男性からすれば、「中年の人」に高い敬語を使う必要はないと考えたかもしれない。また、この場面では、女性がオイキル形を、男性が(ラ)レルを使うという結果になっている。

「市役所」と「物売り」とでは、前者では「他人の目上の人と話すとき」という設定で自分の父親を話題にするものであり、後者では物売りの子を相手に、その子の親を話題にしているのであるから、場面としては前者が上でも、話題の対象としては自分の「父親」の方を低く待遇していると考えて差し支えないと思われる。

さらに、一般的には話し相手に直接言及する場合の方が、話題の第三者として言及する場合より高く待遇されると考えてよいであろう。

以上より、結果からは、概略、オイキル形>ミエル>(ラ)レルといった順の待遇度の序列が認められよう。

ただし、(ラ)レルが非方言場面(「道教え」「傘忘れ」場面など)で、話し相手待遇(話し相手に直接言及する場合)で使われる例や、二重敬語の一方の尊敬語要素となって使われる例は、別種の待遇価を持った標準語的な用法に変質していることを表している可能性もある。表4で、18歳男性と17歳女性が話し相手待遇で(ラ)レルを、話題の第三者として言及する場合にミエルを使っている例を見ると、若い世代にかけてこの変質が認められると言えようか。

また、この形式は第2次調査から加わった「先生の絵」(話し相手待遇表現について問う設問)でも多数出現している。第2次調査で95例(23.9%)、第3次調査で120例(39.6%)と顕著な増加傾向が認められる。さらに、「お書きになられる」のような二重敬語も多く使われ、こちらも増加傾向にある(第2次12例→第3次32例)。

念のため表5に昭和19年以降生まれ以下、すなわち第1次調査時に20歳未満で、話し相手待遇に(ラ)レルを用いている回答者の数を集計してみた。

表5 話し相手待遇(対者を主語として)(ラ)レルを用いている回答者数

調査	傘忘れ	傘貸し	道教え	おつり	市役所
第1次調査(1953年)	1	1	2	0	0
第2次調査(1972年)	14	3	25	1	0
第3次調査(2008年)	7	7	21	0	1

表5の数字を方言形から標準語形に移すと図2、図3の第2次および第3次調査におけるでこぼこがいくらか解消されると思われる。

#### 4.3 方言敬語新形

方言新形と分類した中に入るミエルについて、その意味領域の場面別分布状況の分析と、調査

次ごとの使用者の世代別分布の分析を行った。

まず、標準語のミエルは「来る」の意味だけしか持たないが、当該方言のミエルは「来る」「行く」「いる」「(て) いる」の意味を持つ。調査で実際に現れたミエルの意味領域の分布状況を表 6、表 7 に示す（セル内の数字は使用者数）。

表 6 には経年変化の概要を見た表 1～3 と同じ 101～111 & 113 場面について示す。

ミエルは表 6 では集計していない場面、第 1 次調査の「112 物売り」場面、第 2 次調査および第 3 次調査の「先生の絵」場面、第 3 次調査の「第三者\_\_尊敬表現」の設問でも多く現れた。表 7 ではそれらの場面についてまとめた。「第三者\_\_尊敬表現」の回答には、(ラ) レルと同じく二重敬語、さらに三重敬語も多く現れている。

「物売り」は見知らない物売りの子に父親のいるいないを聞く質問、「先生の絵」は尊敬する先生に「この絵はあなた（先生）がかいたのか」を尋ねる質問、「第三者\_\_尊敬表現」は話題の人物は「今学校にいるか」を尋ねる質問である。

表 6 ミエルの意味領域の分布状況その 1 (101～111 & 113 場面)

調査	場面 意味	道教え	傘忘れ	先生	集金人	議事堂	医者	傘貸し	市役所
		来る				1(対者), 7(集金人) <sup>1</sup>			1(対者)
第 1 次 N=429	行く	2(対者)							
	いる						1(対者)		
	～ている					1(対者)	6(隣人) <sup>2</sup>	1(対者)	1(父親)
	～てくる							1(対者)	
第 2 次 N=400	来る	1(対者)			3(別の集 金人)				
	いる			1(対者)			1(隣人), 1(急病人 の家族)		
	～ている	1(対者)	1(対者) <sup>3</sup>			1(対者)	10(隣人) <sup>4</sup>		
第 3 次 N=306	来る	1(対者)							
	行く	1(対者)							
	いる						2(急病 人)		
	～ている		5(対者)				3(隣人)		

〈凡例〉( ) 内は主語

1: 回答中, 2 例オミエニナル

2: 回答中, 1 例オミエニナル

3: ミエラレル

4: 回答中, 1 例ミエラレル

表7 ミエルの意味領域の分布状況その2 (表6以外の場面)

調査	場面 意味	1次:物売り/ 2・3次:魚釣り	先生の絵	第三者_尊敬表現 【話し手<話し相 手<話題の人物】	第三者_尊敬表現 【話し手<話し相 手>話題の人物】	第三者_尊敬表現 【話し手=話し相 手<話題の人物】
		第1次 N=429	いる	12(父親・父母 ・両親)		
	~ている	2(対者), 8(父 親・父母)				
第2次 N=400	~ている	1(対者)				
第3次 N=306	いる			68(第三者) <sup>1</sup>	82(第三者) <sup>2</sup>	48(第三者) <sup>3</sup>
	~ている		1(対者= 先生)		1(第三者)	

〈凡例〉( ) 内は主語

1: 回答中, 29 例オミエニナル・2 例オミエニナラレル・9 例オミエ

2: 回答中, 1 例ミエラレル・26 例オミエニナル・1 例オミエニナラレル・1 例オミエニナッテオル・7 例オミエ

3: 回答中, 3 例オミエニナル・2 例オミエ

結果からは実際、幅広い意味領域で使用されていることがわかる。具体的な使用例を下に示す。「行く」の意味での使用例:

(3) チョクシンデ ミエタラ マッスグ イクト ワタレマス 【1次: 道教え】

「いる」の意味での使用例:

(4) センセー ミエマスカー スミマセンガ キュービョーニンデスガ スグ キテモラエ  
ンデショーカー 【1次: 医者】

(5) オトーサン ミエマスカ 【1次: 物売り】

「~ている」の意味での使用例:

(6) スイマセン カサオ ワスレテ ミエマスヨ 【1次: 傘忘れ】

(7) アノー チカクノカタガ キュービョーデ イマ クルシンデミエマスノデ オーシンシ  
テイタダケマスカ 【3次: 医者】

(8) センセ ムカシカラ エ カイテミエテネ ズーット コーヤッテ カイテミエマスカ  
マー イー オモイデノ エデ アノ トッテモネー キレーニ カケテマス

【3次: 先生の絵】

なお、表6、表7からは、表1~3では現れなかったミエル使用の広がりを認めることができる。ここで、ミエルがどんな世代に使われているか、調査次別に調べてみた。(セル内の数字は使用者数。カッコ内は女性)

表8 ミエル使用者の世代別分布状況

世代別分類	第1次調査 1953	第2次調査 1972	第3次調査 2008
10代	10 (7)	0	2 (1)
20代	11 (9)	1 (1)	7 (2)
30代	8 (6)	3 (3)	13 (8)
40代	9 (6)	5 (1)	20 (16)
50代	1 (1)	5 (4)	28 (18)
60代	2 (1)	3 (2)	30 (16)
70代	—	1 (0)	20 (8)

表8の分布状況からは、ミエルが第1次調査時、岡崎市で新興の形式で、その後も勢力を広げたであろうことが裏付けられよう。

本節の考察からは、方言敬語伝統形はほとんど使われなくなったことがわかる。使われる場合は、方言場面で多く使われるといった傾向が本節でも確認された。例外的に残った(ラ)レルと新形ミエルは、非方言場面や上位場面でも使われ、かつ、他の尊敬語に重ねて使われることが多くなった。二重敬語や三重敬語の使用が増えていることから、「敬語形式の重層化」とも言える変化が認められることを指摘したい。

## 5. 中間形と丁寧語の共通語化について

本節では、3.3節で示した場面ごとの中間形使用の変化の実態をいろいろな観点から詳しく見ていきたい。

### 5.1 中間形使用の変化の詳細

3.3節で述べたように、中間形使用が多かったのは、第1次調査で、「おつり」、「傘忘れ」、「議事堂」、「荷物預け」場面、第2次調査で「おつり」、「電報用紙」、「荷物預け」、「議事堂」場面であった。第2次調査で第1次調査より使用率が増えていたのは「おつり」と「電報用紙」場面、第3次調査でも使用率が高かったのは「おつり」場面であった。

#### 5.1.1 「電報（振込）用紙」場面での中間形使用

「電報（振込）用紙」場面は、第2次調査で中間形使用率が「おつり」場面に次いで高かった場面で、第1次調査時の約3倍に増えている。しかし第3次調査では使用者は1名（55歳女性）と劇的に減少している。第2次調査時の使用者の世代別分布状況を表9に示す（数字は使用者数）。

表9 中間形使用者の世代別分布状況  
—第2次調査「電報用紙」場面—

世代別分類	第2次調査
10代	2
20代	6
30代	5
40代	5
50代	5
60代	4
70代	1

表9を見ると、20～60代の世代にまんべんなく分布していることがわかる。

次に、中間形の具体的形式例を分類して示す。

- a. デスの前に準体助詞ノ(ないシン)が欠落していると考えられるもの ……28例中23例  
(例)「打ちたいですけど」「打ちたいですが」など
- b. 動詞終止形にデスが続いた形で疑問助詞カが欠落しているもの ……28例中1例  
(例)「するです」
- c. 標準語ならばナイ(否定)とするところがンとなっているもの ……28例中3例  
(例)「いただけんですか」「もらえんですか」「出さんならんくなって」
- d. 動詞終止形接続の方言形ダに標準語形の接続助詞が続いたもの ……28例中1例  
(例)「打つだから」

第3次調査で残った1例は、a.に分類した「いただきたいですが」の形であった。

上例の中間形28例中26例までが丁寧語デスに続く箇所で見られたことになる。

### 5.1.2 「おつり」場面での中間形使用

この場面では3回の調査を通じて中間形の使用率が高く、第2次調査で使用率を増やし、かつ第3次調査において、他の場面で中間形がほぼ現れなくなった中で15.8%も現れた。さらには「荷物預け」と同じく「買いつけの店」という設定であり、標準語を指向するという動機を考えにくい場面でもある。この場面で最も多かったのが「たらない(足りない)」という言い方である。筆者自身この言い方を中間形に入れるかどうかで迷った。結局調査の回を重ねるごとに使用者が確かに減っていたことにより中間形に入れることにしたという経緯がある。

結局、第3次調査で「たらない」を含む表現が現れた回答は「おつり」場面の中間形48例中35例であった。残りの表現は「電報(振込)用紙」場面と同じ様な内容であった。なお、第1次調査では73例中42例、第2次調査では92例中76例となっている。

西部方言と東部方言との対立を表す言語項目として「借る」対「借りる」のような動詞の五段活用と一段活用の対立はよく知られている。岡崎市でも五段活用から東部方言ないし標準語的な一段活用へと変化しつつあること、動詞の活用は、5.1.1で述べたようなノダ相当のダや否定の

ンのようなものよりは話者に認識されにくい（モニターがかかりにくい）であろうことが推測できる。

### 5.1.3 「荷物預け」場面での中間形使用

この場面は、「おつり」場面と同じく「買いつけの店」という設定である。ここでは、クダサイの前部要素が本来は相手を主語とする動詞を選ばないといけないのに、第1次調査で13例と第2次調査で14例、そうならない事例が認められた。

- (9) スグ カエッテ キマスカラ コレオ スコシ アズケテオイテ クダサイ  
【1次：荷物預け】
- (10) スイマセンガ チョット ニモツオ オアズケ クダサイ 【1次：荷物預け】
- (11) チョット ホカニ ヨージガ アルンデスケド カエルマデ チョット アズケテイタダケナイデショーカ 【2次：荷物預け】

(9) (10) (11) の下線部は普通「預かっておいてください」「お預かりください」「預かっていただけないでしょうか」となるはずである。これらは敬語運用の未熟さからもたらされた言い方だとも考えられるが、全国的に認められる言い方ではないので、中間形に含めた。

## 5.2 中間形の消滅と丁寧語の共通語化について

牛山（1953）では、1950年代の調査（50歳以上の者と高校生を対象としたもの）に基づき主要な語法ごとに東西方言の境界線を示している。それによると、岡崎市方言は「口語一段動詞の命令形」「形容詞の連用形」「打消の言い方」に関して西部方言に属し、「ハ行四段活用動詞の音便形」「指定の言い方」に関して東部方言に属する。存在動詞に関しては従来西部方言に属しオルを使う地域である（佐藤 1979 他）。第3次岡崎敬語調査が行われた2008年頃には西部方言に属していた語法や語彙のすべてが東部方言、あるいは標準語と同じ（否定ナイ、存在動詞イルなど）ものになったことがデータから確認できた。また、用言終止形接続のダもほとんど使われなくなった。丁寧語の共通語化はそうした変化と連動していると考えられる。

3節で示した中間形の中には丁寧語デス・マスの産出にかかわるものが少なからずある。5.1節の a. ~ c. などに例を示したようなものである。もともと丁寧語デス・マス成立の歴史は浅く、標準語のデス・マスの形が方言として定着している地域はある程度限られており、デス・マスの体系そのものが変則的なものである。さらには丁寧語そのものが中央語の歴史上長い時間をかけて成立したものである。

岡崎市について言えば、国語調査委員会編（1906a: 364, 1906b: 743）には、「岡崎地方」の丁寧語マスとデスに関して、以下のように記されている。

ませ まし ます ますと (命令ニハ用) ましよー  
(例ヲ認メズ)

命令ニ「ませい」ヲ用キズ (旧藩)

ませ まし ます ますれ(ば) ○ ましよー  
ますと ませー

(但シ命令ニハ用例ヲ認メザルモタゞ遊里ノ兒女ニハ「ましよー」アリ)

命令ニ「ませい」ヲ用キズ (町部)

現在	過去	未	来	
ちゃ	ちゃつた	ちゃろー	ちゃつたろー	
です		でしよー	でしたろー	
でござんす	でござんした	ござんしよー	でござんしたろー	
		だろー	だつたろー	(旧藩)
だ	だつた	だろー	だつたろー	
ぢゃない				
です	でした	でしよー	でしたろー	
		だらあ	だつたらあ	(町部)

岡崎市内では、デス・マスが使われていたとはいえ、標準語と異なる形式や活用形があったことになる。実際、調査では下二段活用のマスルが現れている。

- (12) アー ドーモ ゴシンセツニ マコトニ ドーモ スイマセン ドーモ アリガトーゴザイ  
イマス ワタクシモ スグ コノツギノ エキデ ゲシャイタシマスルノデ ケッコウデ  
ゴザイマスデ ドーゾ ソノママ オカケネガットツテクダサイ 【2次：席譲られ】

さらに、国語調査委員会編(1906a: 364)には岡崎市と東と南で境界を接する額田郡では、一段活用のマスも二段活用のマスも「餘り用キズ」と記されている。中部地方では都市部をのぞくと丁寧語は発達も定着もしておらず、内輪の会話では終助詞を使い分けることによって相手への直接的な顧慮を表していたと考えられる。そのような記述も行われている(小森 1933, 吉川 1972)。筆者は第3次岡崎敬語調査で記述班に属し、面接調査や談話収録調査に携わった。その際、岡崎市旧市街地に接する農村地帯(門前町でもある)で初対面の筆者と会話するような場面でも丁寧語をほとんど使用せず、使用する時は本稿で言う中間形を多発する話者に会い、そのことを記述している(辻 2010: 24-26, 西尾他(編) 2010, CD-ROM 談話 1)。また、面接調査では、回答として得られた敬語形式(尊敬語の標準語形、方言伝統形、方言新形、丁寧語マス等)の丁寧さの順位付けが話者によってまちまちだという事態に直面した。西尾(2010)にはそのことが詳しく記述されており、丁寧さを決定付ける要素として丁寧語「マス」が強く働いている話者も

あれば、「イカレマシタカネ」よりも「オイキタカ」が丁寧な形式であると評価する話者もあれば、その逆の話者もいるとの指摘がある。さらにマスを全く使わないと回答した話者もあったと記されている。

岡崎市は都市であるだけに、マスルやゴザンスを使う元士族もいれば、旧市街に代々住む市民、さらには農村地帯からの流入者もいるというように多様な住民から構成され、そこには混質的な地域言語が形成される土壌があると思われる。岡崎敬語調査のデータに現れた中間形や上述の評価はこのような事情を背景としてしていると考えられる。

「行くです」のような形に関しては、加藤（1973）、井上（1998: 157）に記述がある。彦坂（2006）には、その出発点である「行くノダ／ダ」型の分布を『全国方言資料』（日本放送協会編 第1巻～第5巻、1966～1967、東京：日本放送出版協会）により記した地図がある。加藤（1973）では次のように記されている。

〈読ムデス〉は九州に主勢力を持ちながら全国に散在している。…… 動詞+「です」は標準語とはされていない。しかし、「山です」などからの類推でこれが全国的にまんえんしつつあるような感じである。特に関東から東北南部にかけては〈読ムダ〉があるので、〈読ムデス〉も定着しやすかろう。（加藤 1973: 59）

「行くです」のような形が定着した地方もあるが、岡崎市では一時現れたが定着しなかった。しかし、現れたことにより、ベースとする方言によっては標準語の丁寧語を使いこなすことが予想外に難しいこともあること、丁寧語が相当な距離感をもたらす可能性があることに気付くことができたと言える。

中間形のような表現は通常の意識調査によりデータが得られる性質のものではなく、その記述を実現するような調査を企画することは難しい。しかし、地域言語、言語変化の一つの実態を知らしめるものであり、一時的に生まれ時をおいて消える表現であるからといって無視してしまうには惜しい。今回分析した岡崎敬語調査は、敬語使用意識を方言翻訳式で部分的に問うのではなく、敬語行動を知るために設計された調査で、回答された発話全体を書き取るか録音して得られたデータであり、長期にわたる実時間の調査であったからこそ実態をつかめたと言える。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、岡崎敬語調査トレンドサンプルを用いて、方言敬語形や方言形使用の経年変化について主に形態論的な側面から検討し、その結果を概括的に示した。それに加えて、方言敬語形の待遇価値や意味についても検討した。

分析結果から、次のことが明らかになった。

- (1) 第1次調査時にわずかに残っていた伝統的な方言敬語は、第3次調査時にはほぼ壊滅状態となった。それと平行して方言形全般の共通語化が大いに進行した。
- (2) 方言敬語の衰退、共通語化の過程で、標準語を指向する場面を中心として、中間形が現れたが、それも第3次調査時にはほとんど現れなくなった。

- (3) 例外的に方言敬語伝統形(ラ)レル, 新形ミエルは現代でも盛んに使われている。
- (4) 尊敬語形については, 第1次調査の時点で得られたデータから読み取れる範囲では, 先行研究に示されているとおり, 概略, オイデル>ミエル>(ラ)レルの順に待遇価値が高かったと考えられる。ただし, 第3次調査時にはオイデルはほとんど使われなくなった一方で, ミエルと(ラ)レルはよく使われている。そして, 丁寧語はもとより, 二重敬語・三重敬語の形で他の尊敬語に重ねて使われることが多くなり(「敬語形式の重層化」), 特に(ラ)レルに関してはある時期から本来の性質が変化した可能性がある。
- (5) ミエルは「来る」のほか, 「行く」「いる」「ている」の意味で活発に使用されている。また, 岡崎市で第1次調査時点では新興の形式だったと解釈できる。
- (6) 丁寧語デス・マスと関わる表現については, 第1次, および第2次調査時点で標準語とは異なる形, すなわち本稿で言う中間形を用いる話者が多数いたが, 第3次調査時にはそうした表現の共通語化もかなり進んだ。

中間形の存在は, 標準語の敬語運用能力は方言話者間で均質なものではないこと, 一般には使いやすいとされる丁寧語だが, 方言話者にとっては習熟が難しい場合もあること, を教えてくれる。話者にとっての丁寧さと, 研究者など聞く側が感じる丁寧さとにずれがある可能性にも留意すべきであろう。

(4) で指摘した「敬語形式の重層化」は, 当該地域全体としては形態面で丁寧な方向への変化の一端を表している, ととらえることができよう。

方言敬語形のうち命令・依頼表現については十分な考察ができなかった。今後の課題としたい。

## 参考文献

- 愛知県教育委員会 (1993) 『愛知県の方言—岡崎—』ビデオ解説書。
- 江端義夫 (1981) 「方言敬語法体系の方言地理学的考察—愛知県地方方言のばあい—」『国文学攷』90: 19-32. 広島大学国語国文学会。
- 彦坂佳宣 (1991) 「東海西部地方における尊敬語の分布と歴史—「あなたはどこに行くのか」を例に—」『国語学』166: 22-33. 国語学会。
- 彦坂佳宣 (2006) 「『行くダ』などの言い方をする方言群とその性格」『名古屋・方言研究会 会報』23: 1-11. 名古屋・方言研究会。
- 飯豊毅一 (1987) 「対外身内待遇表現の調査」『学苑』565: 171-183.
- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』東京: 岩波書店。
- 井上史雄 (2011) 『経済言語学論考—言語・方言・敬語の値打ち—』東京: 明治書院。
- 加藤正信 (1973) 「全国方言の敬語概観」林四郎・南不二男 (編) 『敬語講座 6 現代の敬語』25-83. 東京: 明治書院。
- 菊地康人 (1994) 『敬語』東京: 角川書店。
- 国語調査委員会 (編) (1906a) 『口語法調査報告書 (上)』[復刻版] 1986年. 東京: 国書刊行会。
- 国語調査委員会 (編) (1906b) 『口語法調査報告書 (下)』[復刻版] 1986年. 東京: 国書刊行会。
- 国立国語研究所 (1957) 『敬語と敬語意識』東京: 秀英出版。
- 国立国語研究所 (1983) 『敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較—』東京: 三省堂。
- 古瀬順一 (1971) 「三方方言における『お行きる』式敬語表現」『国語国文』8: 35-38. 立正大学。
- 小森俊平 (1933) 「方言より考察したる敬語の用法」『国語と国文学』10-9.
- 西尾純二 (2010) 「第2章 岡崎市における敬語運用の多様性」西尾純二他 (編), 5-14.
- 西尾純二・辻加代子・久木田恵 (編) (2010) 『敬語と敬語意識—愛知県岡崎市における第三次調査—』平

- 成 19 (2007) 年度～平成 21 (2009) 年度 文部科学省科学研究費補助金 [基盤研究 (A) 課題番号: 19202014, 研究代表者: 杉戸清樹] 研究成果報告書 第 4 分冊 記述調査編.
- 大石初太郎 (1976) 「待遇語の体系」『佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集』881–903. 東京: 表現社.
- 佐藤亮一 (1979) 「1 方言の分布」徳川宗賢 (編) 『日本の方言地図』3–52. 東京: 中央公論社.
- 辻加代子 (2010) 「第 3 章 高年層女性話者の敬語体系と言葉の切換え—自然談話分析による記述の試み—」西尾純二他 (編), 15–31.
- 辻加代子 (2012) 「4. 岡崎市方言敬語伝統形式および新形式ミエルの消長」(ワークショップ「岡崎敬語調査報告—継続サンプルの分析—」) 『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』45–50. 日本語学会.
- 牛山初男 (1953) 「語法上より見たる東西方言の境界線について」『国語学』12: 59–63. 国語学会.
- 吉川利明 (1972) 「豊橋方言の待遇表現体系」『日本方言研究会第 14 回発表原稿集』21–29.

## The Changing Dynamics of Traditional Honorifics and the *mieru* Form in Okazaki Dialect: An Analysis of a Longitudinal Study

TSUJI Kayoko

Kobe Gakuin University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

The purpose of this study is to describe the ongoing change in use of dialectal honorifics in Okazaki, Aichi prefecture. Results from the Okazaki Survey on Honorifics, conducted three times between 1953 and 2008, were analyzed in our examination.

In the analysis, we first divided the observed forms into four categories: standard forms, traditional dialectal forms, new dialectal forms (including *mieru* and *chodai*), and intermediate forms. We then examined their overall usage, including context-specific use of these forms as well as the context-specific use of dialectal honorifics. The results of the analysis include the following.

First, the exclusive use of a standard form in all contexts has greatly increased, while the use of traditional dialectal forms has fallen sharply. The use of intermediate forms, which tended to occur in non-dialectal contexts, increased slightly in the second survey but had fallen drastically in the third survey. The context-specific analysis revealed that either the standard or dialectal forms were selected in accordance with the situation.

Secondly, dialectal honorifics have almost entirely disappeared by the third survey, with the exception of the traditional form (*ra*)*reru* and new form *mieru*. The (*ra*)*reru* forms, which previously indicated a lower level of politeness, have now advanced to the higher level, and, along with the *mieru* forms, are now being used frequently, thus transforming into the standard use.

Finally, the existence of the intermediate forms suggests that some dialect speakers find difficulty in mastering polite expressions, and that their ability to apply the standard honorifics is heterogeneous.

**Key words:** traditional dialectal honorifics, new dialectal honorifics, intermediate forms, *mieru*, standardization of polite forms